

# 2019年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

## 事業実施報告書

- |     |                                    |
|-----|------------------------------------|
| I   | スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び   |
| II  | マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成           |
| III | スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築        |
| IV  | 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成 |
| V   | スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成      |

道府県・政令市名【 茨城県 】

学校名【 八千代町立東中学校 】

1 実践テーマ	Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ
2 実施対象者 (学年・人数)	八千代町立東中学校 全校生徒 199名 職員 20名
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名 ( 保健体育 ) ② 行事名 ( ) ③ その他 ( ) (2) 地域における活動 ① イベント名 ( ) ② その他 ( )
4 目標 (ねらい)	○パラリンピックや障がい者スポーツについて学ぶことにより、障がいへの理解と関心を高め、共生社会の実現を目指す生徒を育てる。 ○スポーツマンシップ、不屈の精神、たゆまぬ努力など、アスリートの生き方に目を向け、自分の生き方を考える機会とするとともに、人間尊重の精神を培い、心のバリアフリーを進める。
5 取組内容	<p>【事前学習】</p> <p>1 国際パラリンピック委員会公認教材“i mPOSSIBLE”の活用</p> <p>①映像資料 2016年 リオパラリンピックのダイジェストを視聴し、パラアスリートが躍動する姿を見ることで、障害のある人は特別な人・助けられるべき人という認識を覆し、障害がない人と同じように「可能性のある人」だという発想の転換につなげることができた。 また、“PARA☆DO!”(フジテレビパラスポーツ応援プロジェクト)で藤原選手の特集を視聴し、実際に会って聞いてみたいことを事前に考え、本番を迎えた。</p> <p>②パラリンピッククイズ パラリンピックの歴史や移り変わり、パラアスリートが使用する道具に着目し「できない」ことを「できる」ことに変えるための工夫などを学んだ。</p> <p>③身近にあるバリアフリー 障害のある人や高齢者が来校した際、どんなことに配慮したらいいかを考えた。3年前に建てられた新しい校舎には、バリアフリーの工夫(エレベーター・スロープ・段差等)が施されていることに気づき、普段目を向けることのなかった学校の良さも考えることができた。</p> <p>【講演会の実施】</p> <p>1 日時 令和元年12月18日(水) 14:00~16:20 講師 障害者バドミントン日本代表 藤原大輔選手(株ダイハツ所属)</p>



## 2 講演内容

### ①藤原大輔選手の講演『私とパラバドミントン』

藤原選手のこれまでの人生について、また障害者スポーツを取り巻く現状について、お話をいただいた。

#### ○自身の生い立ちについて

生まれた直後に左足を失い義足での生活となったが、当時は義肢を扱う病院も少なく、高知から兵庫の病院まで通っており、両親に感謝している。また、幼少期に習ったスイミングでは、上達スピードが遅く、友達と比較し悩んだこともあったが、そのとき培ったバランス能力や体幹が、現在バドミントンをする上での基礎になっている。

#### ○パラバドミントンとの出会い

小学校3年生からバドミントンを始めたが、転機は高校2年生。病院のポスターで、「パラバドミントン」の存在を知り、初めて出場した日本選手権で準優勝。「世界で戦えるかもしれない。」と言われ、初めて目標ができ、心から強くなりたいと考えるようになった。筑波大学に在学中、パラバドミントンが2020年から正式種目となることが決定し、東京パラリンピック出場という新たな目標が生まれた。

#### ○競技用の義足について

バドミントン専用の義足はないため、トライアスロン用のものを使用している。試行錯誤しながら改良を重ね、軽さや硬さを調整している。義足は大事な道具であると同時に、義肢装具士さんの努力の賜でもある。国際大会で勝利すると藤原選手の義足をマネする選手が現れるなど、世界でも高い水準にある。



#### ○パラスポーツを取り巻く環境

高いレベルで競技をする上で重要なのは環境。特に、パラバドミントンには実業団がないため、練習環境を確保するのが難しい。現在は所属企業が見つかり、サポートを受けているが、遠征費や給与の保障など、パラアスリートを取り巻く環境は厳しい現状がある。また、施設や設備が十分でない国もまだまだ多く、国際大会や遠征先でのトラブルも多い。

### ②藁科 侑希さんの講演『競技現場とどう関わるか』



障害者スポーツについて、「コンディショニング」「スポーツへの関わり方」「意識の量」「ノーマライゼーション」という4つのキーワードでお話いただいた。

冒頭は、水分補給やウォーミングアップ等に関するクイズを通して、最新のスポーツ科学を根拠に、正しい知識を知ることができた。また、なぜ学校で勉強するのか?と投げかけ、社会人として必要な思考力を磨くために「意識の量」が必要であること。そして、「誰もがノーマルな存在で尊ぶべき命を持つ存在」であるというノーマライゼーションの基本的な考え方を学び、スポーツを通じてあらゆる面での違いを認め合い、自分らしく輝くというメッセージが込められた東京2020イメージ映像「TOKYO 2020 PEOPLE」を視聴した。


### ③デモンストレーション

バドミントン部に所属する生徒に限らず、多くの生徒と対戦していただき、会場が和やかな雰囲気包まれた。体験後は全員と握手を交わし、互いの健



闘をたたえ合い、スポーツマンシップの醸成を図った。

また、足関節のテーピングを施していただき、関節の動きが制限されるといかに動きづらいかを体験した。膝や足首の関節の可動域がない中で

	<p>動くことの難しさを知るとともに、その中で競技をする藤原選手のすごさを身をもって体感できた。</p> <p>【事後学習】</p> <p>後日、改めて講演の内容を振り返り、全校生徒・職員で感想や応援メッセージを書き、藤原選手と藁科さんに送った。また、お二人から頂いたメッセージは生徒の昇降口前に飾らせていただき、生徒はもちろん、来校した方にも興味をもって見ていただけている。</p> 
<p>6 主な成果</p>	<p>&lt;生徒の感想から&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・手術と入院をしたことがあり、そのときとても辛かったけれど、自分の夢に向かって走り続ける藤原選手を見て、私も頑張ろうと思いました。</li> <li>・藤原さんの義足には、いろいろな思いがこもっているんだと思いました。</li> <li>・夢をあきらめない気持ちを私も大切にしたいと思います。</li> <li>・「ノーマライゼーション」という言葉は社会で習って知っていたけれど、今回の講演会でその意味がよく分かりました。</li> <li>・パラリンピックはこれまであまり興味がなかったけれど、東京パラリンピックは見てみたくなりました。</li> <li>・選手が活躍している裏には、藁科さんのような支えている人がいて、その存在はとても大切だと思いました。障害者の人がよりよい生活を送れるよう私も何か役に立てるような存在になりたいです。</li> </ul> <p>生徒から寄せられたメッセージから、ねらいを達成することができたと考えられる。また、質疑応答では、「試合前の緊張とどう付き合えばいいか？」といった質問が藤原選手に寄せられる等、生徒の意識の中に障害がある・ないという壁がすでに取り払われ“一人のアスリート”としての藤原選手を捉えている様子も覗えた。</p> <p>また、世界を転戦する中で経験した藤原選手や藁科さんが話して下さった海外でのエピソードは、各国のスポーツ文化に触れる機会となり、国際理解にもつながった。</p>
<p>7 実践において工夫した点(事業の特色)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○生徒の印象に残る活動にするためには、実際に「人」に会い、五感を使って何かを感じてもらうことが大切だと考えた。目の前で実際にプレーする姿を見て感じた驚きや迫力、同じコートに立ち一緒にプレーできた感動や喜びが、何よりの財産になると考えた。</li> <li>○「する」という選手側の視点と、トレーナーや団体職員として「支える」側の視点と、双方向から講演していただけたことで、スポーツへの多様なかかわり方を体感できるのではないかと考えた。</li> </ul>
<p>8 主な課題等</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○パラリンピックの前年ということもあり、サーキットを転戦する中での連絡・調整が難しかった。</li> <li>○保護者や地域へのPRをもっと積極的に行うことで、さらに多くの方々に聞いていただき、スポーツの輪を広げることができると感じた。</li> <li>○教科を横断したカリキュラムマネジメントが必要だと感じた。共生社会への意識をさらに高めていくだけでなく、実現に向けて前向きに自己の役割を果たせるよう指導していく。</li> </ul>
<p>9 来年度以降の実施予定</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「する・見る・支える」といったスポーツへの多様なかかわり方を授業でも実践し、文化としてのスポーツの価値を高めていきたい。</li> <li>○一時的な取り組みとならぬよう、パラリンピック教育を推進するための学習は継続していきたい。また、体験的な学習(シッティングバレーやゴールボールなど)を、授業でも積極的に取り入れていきたい。</li> </ul>